

分科会5B「教職員の専門性に関する課題」

大島 真美

小中一貫教育の推進と教頭の役割について、グループ討議をした。各県の実情を出し合う中で、小中の文化の違いを互いに理解することが大事で、職員に納得・理解させるのが教頭の仕事であること。教職員の意識をつなぐためにはまずやってみることが大切。そこからできること、できないことが見えてくること。などが出された。

教職員の指導力向上をめざす教頭のかかわり～小中一貫教育の取組を通して～

滋賀県高島市立朽木中学校 今井俊彦先生

<地区教頭会の役割>9年間スムーズな学びができるか。なぜ、小中一貫をするのか。

- ・小中合同研修するメリットは・・・数学の教員がサポートに入った後、小学校でどのくらい学習しているかが分かるので、教えたことが重複しない。
- ・小中は基本的に合わない。教科担任と学級担任では考え方が違う。それぞれの違う文化を埋めることはできない。課題は、子どものギャップ解消に本当になっているか。教職員の満足ですんでいないか。
- ・小学校へ出前授業する。(どの教科でも)オープンスクールで小学生を招く。・・・中1ギャップを減らす。
- ・児童理解をメインに考えた小中連携をしている。中学校の先生に子どもに触れあってもらう。
- ・やることに意味はある。が、子どもの不安がなくなることはない。授業改善につながることはよい。
- ・義務教育学校の合同研修はどうする?→部活終了後や、空き時間、教科ごとに。集まれる先生で
- ・4年生までと5年生からの授業時間や時間割の工夫をしている。大きな変化がないように。
- ・小中の職員室が同じなので、情報共有しやすい。
- ・小中での情報共有しにくい。担当がワンペーパーにまとめて共有。効率的に行う工夫。
- ・地域との連携・・・学校支援ボランティア(学力支援、放課後学習)との調整を教頭がしている。地域コーディネーターを通じて「読み聞かせ・花壇植栽・校区探検」等の人材を見つけてもらっている。調整は教頭。

義務教育9年間ではくくむ 地域とともに生きる 子どもの育成～小中一貫教育の推進と教頭の役割～

大分県豊後大野市立朝地小学校 佐々木直子先生

<協議>

- ・「教職員の意識をつなぐ」・・・まずやってみることが大切。できること、できないが見える。
- ・卒業式の歌の練習に中学校の音楽の先生が来て指導。中学校の先生に慣れる。指導方法を学ぶ。
- ・総合的な学習の時間で中学校で教えた。卒業した児童が中学校でどんな学習をしているのか知ることができた。中学校で時間を作ってもらえれば、専門性を生かした指導に行ける。
- ・文化の違い・・・それを互いに理解することが大事で、職員に納得・理解させるのが教頭の仕事・・・
- ・職員室の机、4年の隣に7年を置くなどの工夫をしている。機会があれば話す→仕組む
- ・宿泊学習の内容を小学校から聞いて中学校の内容を決める。重複を避ける
- ・キャリア教育・・・小中で連携を図る。重複を避ける
- ・人事異動で新しい文化が入り、意識の継続が難しい。
- ・専門家はいてもよいが、誰でもできるようにしておく。校務分掌を固定化させず、どの分野でもできるようにしておく。担当を意識的に変えていく。誰がやってもできるようにしておく。

<講評>

- ・30代の教頭がいる。人材育成が大切になる。後輩を育てよう
- ・教職員の意識改革、教育課程編成を4年でするのは大変だったろう。コミュニティスクールも同時に発足。地域の人は変わらないので、期待も大きい。地域との関係がうまくいけば、教職員の意識も高まる。地域のモデルとなるだろう。
- ・意識改革・・・したことにどんな効果があったかを振り返ることで意識が高まる。やりがいがあるから頑張れる。